

## 協調性に欠ける児童の指導

— 特殊学級における実践 —

脇 川 千代二郎\*

特に情緒や知能の発達の違い3人の子どもの間で、ほとんど毎日のように何かしらの葛藤がくり返されている。これが、学習や協同作業などの能率を著しく低下させていることが多い。そこで、このような子どもたちに協調性を持たせるように努めた。その結果、ときどきはまだ争いは見られるが、遅々とした歩みのなかにも自制心や判断力がついて来て学級の雰囲気もだんだん明るくなりつつある。

### I はじめに

「心身障害児の教育は、単なる興味や情熱だけではできるものではない。」とよく言われる。私がこの学級を担任したときも、ただ普通の子どもよりも成熟や発達が少し遅れているだけだ、という考え方で、さしたる注意も払わずに子どもたちの生活に接していた。

昨年も3・4年の低学年部と5・6年の高学年部の2学級編制で、児童数は14名であった。初めは考えが幼稚なためのいざこざぐらいにしか考えていなかった。

しかし、だんだんようすがはっきりしてくるにつれて、そんなに簡単に理解されていいものではないことがわかって来た。どうしてそのような変化がおこってきたのか、まず、担任2人で考えてみることにした。その間にも事はどんどん進行していく。けんかは多いときには1日に3回、少くとも1日に1回はあった。だがその解決のしかたは一般的な道理を並べた、ごく道徳的な説諭や禁止・命令・指示だけの、その場限りのものであった。このようにして2週間ぐらひは過ぎた。

いろいろ原因を調べてみると、けんかの発端にはたいてい3人の同じ子がかかわっていることがわかって来た。ここで問題解決の緒が見つかったような気がした。

そこでこの3人の子を中心にして、子どもたちの行動を理解しながら、子どもたちの人間関係の改善を図ってみようと考えた。

### II 児童の概要

- (1) 学級のように 低学年部 3年 男子3名 女子1名、4年 男子2名 女子1名  
高学年部 5年 男子2名 女子1名、6年 男子2名 女子2名

ふだんは仲がよく、休みの日など、ときどきお互いの家庭を訪問し合っている。休み時間などは両学級とも交流がうまくいき、かばい合いながら遊びや仕事をしている。

## (2) 3人の子どものようす

- A(男) 4年生・脳性まひ、運動能力劣る、考え方も体つきも幼稚で、機械的な記憶は少しできるが総合的な判断、弁別力などの能力は低い。目と手の協応があまりうまくいかない。四肢の力の制御がよくできない。
- B(男) 5年生・家庭的に恵まれないため、欲求不満が強く、それが乱暴、粗野な行動となって出てくる。基礎学力、躰も身についていない。
- C(女) ときとしてとても優しいが、ことばつきが荒く、すぐ人の欠点を指摘して非難する。他の意見をとり入れたり、人を許したりしようとする受容的態度が少ない。

## Ⅲ 実践の結果と考察

### 1 指導方針

3人ともそれぞれ強い個性を持っているので、教育相談的な配慮や態度をもって指導し、思いやりのある、温かい心をもって人に接することができるようにさせたい。そして早く「自己」について目ざめさせるようにさせていきたい。

### 2 実 践

#### 〔事例 1〕

12月23日(月)3校時よりクリスマスのかざりつけを始める。1週間前に学級会を開き、ひとりひとりの役割はきめてある。紙のくさりや折り鶴などのかざりもひまをみては作ってあった。

作業開始して20分ぐらいたったとき。

B「Aがはたいたんよー。」

A「はたいてなんかいないねっか。」

ここで5分ぐらいわいわい言い合い、とっくみ合いが始まった。

そこへCが仲に入り。

C「みんないっしょうけんめいやっているのに、けんかなんかして。やめれ！」

Cがむりに2人をはなそうとする。

するとBが突然Aからはなれ、Cにとびかかる。かざりが散らばり、だいぶいたむ。

ほかの子どもはわいわいさわぎ出す。

Cはとっ組み合いをしながら、ものすごいけんまくでののしり始める。

Aはまだ興奮がさめず、1人で大声でBの悪口を言っている。

子どもたちがみんなでBとCを引きはなす。



〔処置〕

AとBを別室に呼ぶ。

T「B，どうしたの。」

B「はたいてなんかいないよ。」

A「うそいえ，はたいたねか。」

ここでも「はたいた」「はたいてなんかいない」のやりとり。

そこでAには……Bは病気で薬をのんでいるのだが，ちょうど薬が切れて手かげんがうまくできなかったのだ。ほんとうはAに声をかけたくて背中を軽くたたいたのだが，つい力が入りすぎて「はたいた」ようになってしまったんだ。

Bには……なできるようにしたほうがAにも喜ばれるよ。

Cには……Bは体が弱いんだから，Cがかわいがってやると，早くなおるかもしれないね。みんなで弱い人のめんどろをよくみようね。

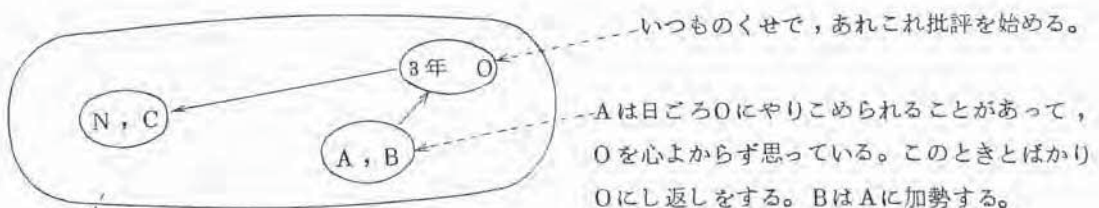
3人は「ごめんね」「ごめんね」とあやまりながら出て行った。ほかの子どもたちはいたんだかざりをなおしたり，かざりつけをやったりしていた。そして8人がそろって教室に入るとき，拍手で迎えてくれた。

〔事例2〕

2月14日（金） ゴルフ場へスキーに行き，給食の少し前に帰る。みんながスキーやそりを教室前の水道のところに置く。着がえをしたり，くつやアノラックをストーブのそばで乾かし始める。

そのとき廊下でまたけんかがおこった。

原因は，6年のNがアノラックをぬぐおうとして振った手が，Cの肩に当たったことから，次のように波及していった。



ほかの子どももわいわいさわぎ出し，給食の準備が約20分おくれた。これを見かねた5年のMが「給食はどうするの。」の一声でみんなが冷静になり，やっとおさまった。給食のときみんなの前で，さわぎをおさめるのにもこんな方法があると気づかせ，Mをおおいにほめた。Mはおとなしい，ほとんどけんかには加わらない子で，みんなにも親しまれ，信望を得ている。

このように，子どもの間で解決することもできる。

## 〔事例3〕

8月9日(土) 全校登校日、下校のとき低学年部教室での廊下のところでもめごとが始まっていた。原因は4年Oが8月になってAと遊ぶことにしていたが、その約束を守らなかったことらしい。AはOに激しくつめ寄っていた。そこでほかの子どもを帰し、初めは1人ずつ、次に2人いっしょに面接を行った。その結果、

Aは

○Oはふだん人のことをなんのかんのと口出しをするので、しゃくにさわっている。

○顔を見ただけでも、ときどきむしゃくしゃする。たまにいじめてやりたい。

と訴えた。しかし家庭的なさびしさについては、ふれることも酷に思ったので聞かなかった。だが、ことばづかいのようすや表情から、そのさびしさにいっしょうけんめいに耐えているようすが、ありありとくみとることができた。

Oは

○Aは乱暴で、言うとおりに約束しないと返しをされるおそれがある。

○大声を出したり、さわぎまわったりするのでいやだ。

○自分もあんまりおしゃべりすぎると思うが、つい口をついて出てしまう。

## 2 人の話し合い

○相手の気を高ぶらせないような心づかいがみえた。

○自分のことを反省してみる心の余裕が見えた。

## 3 考 察

〔わがままな子〕………C

他人のめいわくも考えずに、自分の要求や主張をどこまでも押し通そうとする自己中心性の強い子。

○親(家族)が溺愛した——ほしいものは何でも与えられ、やりたいことを何でもすきにできるようにして育った子ども——自分の要求をコントロールすることを学ぶ機会がもてなかったからではないだろうか。

○両親が年をとってから生れた子で、生れつき体が弱かったからであろう。

こんな子どもたちには体験を通して次のようなことを学ばせていこう。

○世の中には自分以外のおおぜいの人たちがいること。

○自分がしたいと思っても、してはいけないことがあって、ある場合には自分の要求をおさえてがまんしなければならないときがある。

そのときには次のようなことにも留意しておこう。

○干渉しないでみる——わがままな子は依頼心が強く、あまったれであることが多い。

○自尊心を傷つけない——わがままな子は自己評価が高いことが多い。だからあんまり人前で叱ったり、友だちと比較してプライドを傷つけたりしないようにしよう。



◦ エネルギーを正しく発散させてやる——意義ある目的に向かって発散させる。

つまり「わがまま」は、幼児的な性格が大きくなって残っていて、自分の立場と相手の立場の区別や、自分と他人の区別がじゅうぶんにできない状態であろう。

〔協調性のない子〕………A，C

子どもの協調性は社会生活のだいじな要素である。これが欠けているとまわりの人にきらわれ、自分の意志に反して孤独に追いこまれる危険がある。

- 5・6才という時期は社会性を伸ばすのにたいせつな時期であるが、このときなかまとしての規律や協調性をつけることができなかった。
- 自分の役割が理解できない——なかまの共通した目標がどこにあるかをつかめないと、子どもはなかまの一員としての役割が自覚できないので協調のしようがない。遊びにかぎらず、工作や実験などにしても、お互いの役割と仕事の手順が理解できなければ子どもたちの間に協調性は生れない。
- 能力がかけはなれているとき——なかまの子どもたちと自分の能力がかけはなれていると歩調が合わないから協調できない。なかま全体の速度がだいたいそういうことが必要である。
- わがままや利己的なとき——目標の達成には、ある程度なかまの要求を入れる度量と忍耐が必要である。
- 競争心が強すぎる——競争心は小学校2年生ごろから強くなってくるが、ある程度の競争心があると仕事の能率が上がるし、なかま全体の士気が上がる。しかし度が過ぎるとなかまとの緊張を必要以上に強めて、すべてが円滑にはこばなくなる。
- 社会性と情緒にかたよりがあるとき——ひとり遊び、乱暴、あきっぽいなど情緒に安定性がないと協調性は発達しにくい。

このような子はどのようにしたらよいだろうか。

- ルールをわきまえさせる——特にBにはこれが必要である——野球でも仕事でも必ずルールがあり、ひとりひとりの役割がある。また、気にいらないことがあっても、それをじっとがまんする忍耐力を持たせることが大切である。
- 競争心をあおりたてない——よい成績をとらせることやほかの子に負けないうにということに夢中になってしまわないように。また、社会的技能の未熟なこの子たちにとって、グループと調和しながらつき合っていくことは想像以上に難かしいようである。
- グループの中に入れてやる——この子たちの能力にふさわしいグループを作ってやり、その中に入れてやったり、気の合った友だちを得させる。好きな友だちや尊敬できる友だちがいれば、少しぐらいの不満はあってもがまんでき、忍耐力は養われるのではない。

また、AやCは短気で、すぐ感情をむき出しに話してしまう。こういう性格も友だちと協調していく上に弊害となってくる。このようなAやCの短気を何とかなおし、なかまにとけこんでいけるような協

調性を持たせたいといつも考えていた。自分の欲求が満されないとすぐ怒り出す。ほかの人のやり方が気に入らないと言っては怒り出す。そこで、次のような手だてを考えた。

「怒り」は願望の強さに比例するのではないだろうか。

。怒りはその子の持っている強い願望が侵されたときにおこるようである。ふだん子どものようすを見ていると、強い要求や願望がないときや、願望等が達成されたときには怒らない。AやCは正義感が強く、また感情が過敏であるのでこれも原因の一つになっているようである。また、Aは家庭的に恵まれていないことなど、その補償行動としても考えられる。Cは性格からくるもののように考えられる。(だから無気力で受け身のKなどは、怒りが出にくい)

。短気な子どもとそうでない子どもの区別は、この要求などの強さだけではない。他人から受けた刺激に直接的な反応を示す場合と、いったんそれを自分の心に受けとめて考えてみる余裕を持てる場合との違いがあるようである。だからこの余裕を持つような訓練が必要だと思う。

また、怒ることのよしあしをも教えなければならない。怒ってよい場合と悪い場合の区別を、子どもによく理解させなければならないと思う。激しい怒りの感情をなまのままでぶっつけて相手を傷つけたり、人間関係にひびを入れたりしないように、例をあげながら具体的に説明しようと思う。

#### IV おわりに

この問題をとりあげてみて、子どもの行動の裏にははかり知れないいろいろの要因があることが、わかってきた。問題行動にも深い理解を示し、出来る限りの援助や指導をしていかなければならないと思う。最近この3人の子どもたちも、それぞれ考え方が確立して来たようで、わずかながら進歩のあとが見え、以前のような激しい、たび重なる争いが少なくなった。

これからは教育相談の技術をさらに身につけ、この子どもたちの幸せのために努めたいと思う。社会的にも心身の面にも弱い立場にあるこの学級の子どものささえになってやりたい。